

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳についての断章

山岡洋一

- 15年に数千点 - 明治初期の大翻訳時代

明治初期には考えられないほど大量の翻訳書が出版され、日本の近代化を支える一助になった。明治初期の大翻訳時代と当時の翻訳のスタイルを紹介する。

誰も教えてくれなかった英語（最終回）

柴田耕太郎

- おろそかにされがちな語法

英語は論理的な言語だ。規則を知れば、誰でもが楽しく学べるはず。連載の最終回として、おろそかにされがちな語法をいくつかとりあげる。

私的ミステリ通信（第8回）

仁木めぐみ

- シャーロック・ホームズの基礎知識

シャーロック・ホームズの「150回目の誕生日」を記念して、意外と忘れていたホームズの半生を振り返る。

翻訳についての断章

山岡洋一

- 翻訳教育と翻訳の技術

翻訳というのは結局のところ技術の問題なので、教育ができないわけがないという見方について考える。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

15 年に数千点 - 明治初期の大翻訳時代

19 世紀半ば以降の日本の近代化は、ある意味で当時の常識を覆す動きであり、世界史に残る偉業だとすらいえるだろう。そのなかで翻訳が少なからぬ役割を担ったのはたぶん確かなので、翻訳について考えるのなら、明治初期の翻訳に注目するのが当然だ。

明治の翻訳というと、たとえば二葉亭四迷が先駆者として有名だ。有名な「あひゞき」が発表されたのは明治 21 年（1888 年）だ。二葉亭は 1864 年に江戸で生まれたというから、教育を受けたのは明治に入ってからだ。この事実をみると、明治も半ばのこのころになれば、外国語の教育も進んで、ようやく翻訳もできるようになったのだらうと思える。

だが、このように考えるのは、小説の翻訳を中心に考えるからなのかも知れない。翻訳の歴史を扱った本はいくつかあるが、たいていは小説や詩の翻訳をテーマにしている。たぶん、翻訳研究者に文学系の人が多いからなのだろう。日本の近代化に翻訳が役立ったとするなら、主戦場は自然科学や社会科学、思想などのはずである。

文明開化の時期の翻訳を考えると、便利な資料に加藤周一・丸山真男校注『日本近代思想体系 15 翻訳の思想』（岩波書店）がある。この本に紹介されている明治初期の翻訳は、詩や戯曲もあるが、思想、法律、歴史などの分野のものも多い。丁寧な解説もあるし、翻訳だけでなく原文もあわせて紹介しているので、当時の翻訳を知るには恰好の資料だ。

『翻訳の思想』は絶版になっているが、幸い、丸山真男・加藤周一著『翻訳と日本近代』（岩波新書）がある。『翻訳の思想』の編集過程での問答を記録したもので、いわば座談会のようなものなので、はるかに読みやすい。新書なので安いし、入手しやすい。

『翻訳と日本近代』を読んでいて、少々驚く話がでていた。『経国美談』で有名な矢野文雄（竜溪）の『訳書読法』（明治 15 年）を紹介した部分だ。明治 15 年にはすでに「其ノ数幾万巻」の翻訳書が出版されていて、何をどう読めばいいのかが一般の読者には分かりにくくなっていた。そこで矢野は「内務省図書局二納本セル総訳書ノ目録」を調べ、「数千部ノ多キロー々

精査シ」、読むべき翻訳書をこの本で紹介したというのだ。

これを読んだとき、「幾万巻」とか「数千部」とかは白髪三千丈の類に違いないと思った。明治 15 年にそれほどの数の翻訳書がでていたなどとは考えられないと思ったのだ。ほんとうはどれぐらいの翻訳書が出版されていたのか、調べてみようとも考えたが、そのころは調べる方法は見つからなかった。

最近、国立情報学研究所が公開している大学図書館所蔵図書データベース、Webcat Plus で、ある程度までは調べられることに気づいた。これは全国の大学の図書館にある蔵書のデータベースだから、出版された図書の全数のデータベースではない。それでも、出版年別に一覧表を表示させることもできるので、翻訳書の点数を調べることがある程度まで可能だ。

そこで 1868 年から 1882 年まで 15 年間に出版された和書の一覧表を作り、そのなかから翻訳書を選んでみた。結果は以下の通りだ。

	総点数	翻訳書点数	翻訳書純点数
1868年	290	25	19
1869年	279	37	32
1870年	275	35	22
1871年	356	76	53
1872年	410	108	84
1873年	668	132	106
1874年	757	155	116
1875年	781	168	130
1876年	780	172	124
1877年	793	155	114
1878年	789	182	128
1879年	818	188	159
1880年	805	117	88
1881年	934	138	89
1882年	978	181	146
合計	9713	1869	1410

注：Webcat Plus (<http://webcatplus.nii.ac.jp/>) のデータより作成

この 15 年に、データベースに収録されている和書・文書の総点数は 9713 点（かなりの数の文書が含まれているので、出版点数ではない）、そのうち翻訳書が 1869 点もある（翻訳書がどうかを書誌情報から確認できないものは除外した）。このうち、あきらかな重複を取り除くと、翻訳純点数は 1410 点である。

簡単には確認できない重複もあるので、この 1869 点のうち純点数はもう少し少ないだろう。だが、翻訳と銘打たない翻訳書も多かったし、これは当時の翻訳書の全数リストではないので、明治 15 年までの 15 年間だけで 1500 点以上の翻訳書が出版されているはずだ。『訳書読法』がいう「数千部」はそれほどの誇張ではないようだ。

『訳書読法』が書かれた経緯とその内容からも、当時の翻訳熱のすさまじさが分かる。『翻訳と日本近代』53 ページ以下、『翻訳の思想』269 ページ以下の内容をまとめると、こうなる。大分県の南端にある現在の佐伯市に「訳書周覧ノ社」、つまり翻訳書の読書会が作られ、佐伯藩出身の矢野竜溪に「有益ノ訳書ヲ送致センコトヲ請フ」。矢野は「有益ノ訳書」を送ると同時に、「之ヲ読ムノ順序方法ヲ誤テ之ヲ解スルニ苦シマンコトヲ恐レ、更ニ一篇ノ訳書読法論ヲ草セラル、則チ是書ナリ」という。

『翻訳の思想』の 273 ページ以下に「読ムベキ書目」が見事に分類されて並んでいる。地理、歴史、道徳、宗教、政治、法律、経済、礼儀、医学、心理、論理、物理、化学、生物、天文などの訳書を紹介し、その後

に雑書として、進化論、文明史、社会、伝記、乱世史、紀行、小説をあげている。

たとえば、歴史ではヒュームの『英史』、宗教では『旧約全書』と『新約全書』、政治ではトクビルの『自由原論』（『アメリカの民主主義』）、ベンサム『立法論綱』、経済ではミルの『経済論』、生物学ではダーウィンの『人祖論』、社会学ではスペンサーの『社会学』、ミルの『利学』（『功利説』）と『自由之理』、伝記ではスマイルズの『西洋立志論』があげられている。

小説は 9 点紹介されている。『経国美談』ももちろん入っており、それ以外に『イソップ物語』、ベルヌの『八十日間世界一周』と『月世界旅行』、デフォーの『ロビンソン漂流記』などがあげられている。

明治 15 年までの 15 年間に翻訳出版された 1500 点近くのリストをみていくと、小説は意外なほど少なく、矢野があげた 9 点以外ではバニヤンの『天路歷程』が目立つくらいだ。

翻訳点数がとくに多いのは、医学、工業技術、農業

明治初期の翻訳書例 (Webcat Plus による)

- 萬国公法, 4 卷, 畢泗林著, 西周助訳, 1868
西洋經濟小學, エリス著, 神田孝平重譯, 1868
博物新編譯解, 合信著, 大森秀三譯, 1868
和蘭政典, 神田孝平訳, 1868
英政如何, 14 卷, アルバニー・ホンブラン著, 鈴木唯一譯, 1868
英國策論, ストウ著, 1868
中外新聞, 會譯社 訳, 1868
中外新聞外篇, 會譯社譯, 1868
切斷要法, 田代一徳訳, 1868
窒扶斯新論, (米) 普林篤(フリント)著, 松山(勤)棟菴訳, 1868
陣中手療治, (米) スコット著, 隈川宗悦纂輯, 1868
外療一斑: 士官心得, 近藤誠一郎訳, 1868
外國事務, 福地源一郎譯, 1868
交通起源: 萬國公法全書, ヘンリー・ホイトン著, 瓜生三寅訳, 1868
泰西國法論, シモン・ヒッセルリグ著, 津田真一郎譯, 1868
馬太傳福音書, 何進善選輯, 理雅各校訂, 1868
化學入門, ガラジン著, 桂川甫策, 石橋八郎譯註, 1869
和蘭學制, 内田正雄訳, 1869
議事院談, 福沢諭吉訳述, 1869
西洋英傑傳, 作樂戸痴篤譯編, 1869
經濟原論, 彼理(アルザル・レザム・ペーリー)著, 緒方正, 箕作麟祥訳, 1869
ピネラ氏原板 英文典, ピネオ著, 1869
世界國畫, 福澤諭吉譯述, 1869
西史 要, キュルティス, チャルレス著, 福地萬世譯, 1869
泰西史鑑, 物的爾(ウエルテル)著, 珀爾備訳, 西村茂樹重訳, 1869
清英交際始末, 松田晉齋譯, 1869
西洋驍方, 牛坡樵夫訳, 1869
洋兵明鑑, 5 卷, 福沢諭吉, 小幡篤次郎, 小幡甚三郎合譯, 1869
舍密局開講之説, ハラタマ述, 三崎囁輔訳, 1869
英國議事院談, 2 卷, 福澤諭吉譯述, 1869
朋白氏藥論, 玉函涅斯・朋白・・・榕爾垓高爾德著, 司馬凌海訳注, 1869
理化新説, ハラタマ述, 1869
廣鑿法, 依、依、結爾別兒篤撰, 石黒(恒太郎)忠惠譯補, 1869
蠶種説, 柳河春三譯, 1869
泰西商會法則, 神田孝平訳, 1869
旗章説略, 海老名晋訳, 1869
英國刑典, 鈴木唯一, 後藤謙吉共訳, 1869
狂犬咬傷毒論, ケレーフェ著, 越智良曉訳, 1869
療疫新法, (独) 思多樂蔑謁兒著, (蘭) 私屈夜爾爾訳, 緒方子文重訳, 1869
痢疾篇, (蘭) 毘私骨布著, 1869
西洋新説置飼の菜, 出浦銃之介譯, 1869
西洋各國錢穀出納表, マルチン著, 小幡篤次郎譯, 1869
經濟原論, 箕作麟祥訳, 1869
脩身論, 1869
外國交際公法, 巴命馬兒爾原撰, 福地源一郎譯訂, 1869
博物新編補遺, チャンブル著, 小幡篤次郎譯述, 1869
眼科摘要 9 卷, 朋白鈔, 倉次元意譯, 1869
萬國歴史, ベイトル・バアリイ著, 1869
西洋易知録, コルリール著, 河津孫四郎譯, 1870
西洋學校軌範, 2 卷, 小幡甚三郎撰訳, 1870
格賢勃斯英文典直訳, G.P.Quackenbos 著, 1870
泰西農學, ソーマス・シ・フレッチェル著, 緒方儀一譯, 1870
刑法, 箕作麟祥譯, 1870
英國史略, 河津孫四郎訳, 1870
西洋開拓新説, 緒方正譯, 1870
西洋史記, 駝橋慶原撰, 村上義茂重訳, 1870
佛蘭西法律書刑, 箕作麟祥譯, 1870
兵學提要, マハン著, 堤董真訳, 1870
海外新聞, 箕作麟祥 訳・編, 1870
理化日記, ヘルマン・リッテル述, 市川盛三郎訳, 1870
試藥用法, (独) フレセニユス著, 三崎囁輔(尚之)訳, 1870
英國商法, チューソン編, 1870
天然人造道理圖解, 田中大介纂輯, 1870
智環啓蒙, 香港英華書院從英文譯出, 1870
地學事始, 松山棟菴譯述, 1870
袖珍藥説 3 卷, 柳河春隆閣, 田衡平譯補, 1870
解體説約, 篠田秀道譯述, 1870
海外國勢便覽, 内田正雄編輯, 1870
地學事始, 松山棟菴譯述, 1870
化學訓蒙 4 卷, 石黒忠惠譯述・編輯, 1870
性法略(13), 畢泗林著, 神田孟格譯, 1871
官許佛和辭典, 好樹堂訳編, 1871
泰西勸善訓蒙, 箕作麟祥譯述, 1871
泰西勸善訓蒙, ボンヌ著, 箕作麟祥訳述, 1871
萬國新史, 箕作麟祥纂輯, 1871
西洋水利新説, 滿才思樓主人譯述, 1871
五洲紀事, 寺内章明譯編, 1871
通法撮要, 伊熊氏著, 何禮之譯述, 1871

技術、法律などの分野である。当時、必要に迫られていた分野で大量の翻訳が行われていたのだろう。また、初等中等教育の教科書や、各種の分野の入門書が多数翻訳されていることにも気づく。外国から学んで国民を教育するという目的がはっきりしていたことが、翻訳書のタイトルを眺めただけで読み取れる。

繰り返すが、ここで対象にしているのは明治 15 年までの翻訳である。当時はまともな辞書もなかった（当時の翻訳書には『ウェブストル氏英語字書』などもあるが）。それよりも何よりも、欧米の考え方を理解するのがきわめて困難だった。そして、たとえ理解できてもそれを表現する語彙が日本語になかった。その時代に、よくここまで翻訳ができたものだと思う。

明治初期の翻訳を読むと、当時の苦闘の様子がよく分かる。この時代には、ヨーロッパの言葉で書かれた欧米の本を、漢文という枠組みを使って何とか表現するために格闘したのだろう。翻訳のスタイルは直訳ではなく、意識だといえる。

たとえば、中村正直訳『自由之理』の冒頭部分をみてみよう。これは経済学者、哲学者として有名なジョン・スチュアート・ミルの On Liberty の翻訳である。原著の出版は 1859 年、翻訳書の出版は 1872 年だから、ほぼ同時代に訳されている。

自由之理、序論

リベルテイ〔自由之理〕トイヘル語ハ、種々ニ用ユ。リベルテイ ヲフ ゼ ウーイル〔主意ノ自由〕（心志議論ノ自由トハ別ナリ）トイヘルモノハ、フーイロソフーイカル 子セスシテイ〔不得已〔ヤムヲエザル〕之理〕（理學家ニテ名ツケタルモノナリ、コレ等ノ譯後人ノ改正ヲ待ツ。）トイヘル道理ト反對スルモノニシテ、此書ニ論ズルモノニ非ズ。此書ハ、シヴーイル リベルテイ〔人民ノ自由〕即チソーシアル リベルテイ〔人倫交際上ノ自由〕ノ理ヲ論ズ。即チ仲間連中（即チ政府）ニテ各箇〔メイノ〕ノ人ノ上ニ施シ行フベキ權勢ハ、何如〔イカ〕ナルモノトイフ本性ヲ講明シ、并ビニソノ權勢ノ限界ヲ講明スルモノナリ。（『明治文化全集』第 5 卷、日本評論社、1927 年、傍点は太字で示した）

THE subject of this essay is not the so-called 'liberty of the will', so unfortunately opposed to the misnamed doctrine of philosophical necessity; but civil, or social liberty: the nature and limits of the power which can be legitimately exercised by society over the individual. (John Stuart Mill, On Liberty, Penguin Classics, p.59)

たとえば liberty、society、individual、nature などの訳に苦勞している様子が読み取れるはずだ（この 4 つの語は柳父章が名著『翻訳語成立事情』（岩波新書）

で取り上げた 10 の言葉のなかに入っている）。

苦勞したのは中村正直が英語をよく読めなかったからなのだろうか。あるいはミルの主張をよく理解できなかったからなのだろうか。『自由之理』を読むと、どちらでもないと思えない。英語力の点でも、内容の理解力の点でも、中村正直らの当時の翻訳者は間違いなく巨人だ。それと比較すれば、いまの翻訳者はせいぜい子供といえるほどの力しかない。

当時の翻訳は、中村らの巨人にとってすら、いまでは想像もつかないほど困難な作業だったのだろう。たとえば society や individual という単語をどう訳しているのかが分からないのは、訳語が決まっていなかったからではない。話はそれほど単純ではない。たしかに訳語は決まっていなかった。だが、訳語が決まらないのは、これらの語で表現されている概念がそれまでの日本になかったからだ。概念がないのは、考え方が違っていただけだからだ。考え方が違っていただけの程度まで、現実が違っていただけだからである。

そして、翻訳にあたっては、現実の違い、考え方の違い、概念の違いを理解するだけでは不十分だ。理解した結果を読者に伝えなければならない。欧米の現実、考え方、概念を知らない読者に原著の内容を伝えようとするとき、直訳調では何も伝わらない。意識になるしかない。そして、意識にあたっては漢文という枠組みを使って表現する以外に方法はなかったはずだ。漢文は中国の古典を取り入れるために作られた文体なので、日本語の文章体のなかで翻訳にとくに適している。

その後、たとえば liberty は「自由」、society は「社会」、individual は「個人」、nature は「自然」という風に訳語が決まってくる。これらの語があらゆる概念が理解されるようになったのではない。訳語が決まっただけだ。だがこうなると、たとえばひとつのセンテンスで social を「人倫交際」と訳し、society を「仲間連中」と訳するのは許しがたいと思えるようになったはずだ。まして「即チ政府」という注をつけるのは、こうして、明治初期の大翻訳時代の後に、原語と訳語の一対一対応を追求する直訳調の翻訳がはじまったのだろう。この点についてはいずれ、明治初期の翻訳とその後の翻訳を比較検討するなかで考えていきたい。

おろそかにされがちな語法

(7)動作(dynamic)動詞と状態(stative)動詞

動作動詞 D：人が自分の意志でコントロールできる行為・状態をあらわす

状態動詞 S：人が自分の意志でコントロールできない状態・出来事をあらわす

DとSの区別厳密ではないが大筋ある(ジーニアス英和第二版に詳しいが、類別の困難性からか第三版では消えている)。

- ・状態動詞はふつう進行形にならない。
なっている場合は特別な意味合いをもつ。

例： The river is now flowing very rapidly.
(増水などで一時的に流れが早い状態が感じられる)

・意志によって左右できない知覚や心の動きなどをあらわす動詞(doubt, want, believe, know, remember, think, love など)も通常は進行形にしない(進行形の意味はcanで示す)。

するときにはなんらかの(とくに話者の感情)意味が付与される。

例： You are always doubting my word.
(いつもヒトを疑ってばかりいて《非難》)
What are you wanting?
(いったい何が欲しいんだい《和らげ》)

・「ものが見える、目にはいる」という意味での see はSで、進行形にならない。

例： I see the two birds.
× I am seeing the two birds.
「見物する」(他に、調べる、考えるなど)の意味では、自分の意志が入るからDになり、進行形がとれる

The tourists are seeing the sights of Hong Kong.

と、ここまでは学校文法で教わっているだろうが、状態が動作かわりにくい或いは場合によりどちらにもなりそうな動詞がある。そこで二つの間に「変化動詞」という考え方をいれると結構わかりやすくなる。

たとえば be は「...である」(状態)と「...になる」(変化)の二要素がある。

例： I am a teacher. (私は教師である)

I will be fifteen tomorrow. (私は明日十五歳になる)。

また make なら「...する」(動作)と「...になる」(変化)。

例： I make a house. (私は家を作る)

You will make me a good father. (あなたは私のよい父親になるでしょう)

こうすると The door is locked. がなぜ「ドアが閉まる」と「ドアは閉まっている」のふたつの意味を持ち得るのかの説明がつく。

同じ状態動詞でも主語が人が物かで進行形がとれたりとれなかったりすることがある。例えば stand. He was standing. がおかしくなく The lighthouse is standing by the sea. がおかしいのは、建物が一時的に立っていることは通例あり得ないからだ。

仮定法内の動詞が状態動詞か動作動詞かでも、若干意味に違いがある。

If I were a bird, I could fly to him. (私が鳥だったら、彼のところに飛んでいけるのに)

If he tried harder, he would succeed. (彼はもっと一生懸命やれば、成功できるのに)

If+過去形, 助動詞 would, could と典型的な仮定法過去の形だが、微妙に訳が違っている。上の状態動詞は現在までの仮定、下の動作動詞は現在からの仮定を示すからだ。

(8)過去・現在・未来

英語には未来動詞はないというと驚くかもしれない。「食べる」ならフランス語であれば je mangeais, je mange, je mangerai (私は食べる)と過去・現在・未来形があるが、英語は動詞の未来形がなく will 等で代用するのである。

例： She will be in the house.

現在形は

状態動詞では、過去から未来につづく状態を示し

動作動詞では、過去から未来に反復されることがらを示す。

例： Shakespeare sleeps here. (シェークスピア、ここ

に眠る—墓銘碑)

I go to church on Sunday. (いつも日曜には教会へ行っています)

過去形は「遠さ」をあらわす。

それが

時間的 I went to Paris last year. (去年パリに行きました)

反実的 We could win if we tried harder. (熱心にやれば勝てたんだが - 仮定法)

気分的 Could you please help me? (手伝っていただけますか)、意味合いとなる。

will は 話者の意志 単純未来 現在の推測 習慣・慣習の四つが主な意味。

Emerson says that if the stars were visible only once in a hundred years, the whole world would await the spectacle with breathless interest.

(星が百年に一度しか見えないとしたら、世界中の人々は固唾を呑んでその光景を待つことだろうに—反実仮想)

In books on logic they will tell you that it is absurd to say that yellow is tubular or gratitude heavier than air;

(哲学の本には、黄色は管状をしているとか感謝は空気より重いなどというのは、馬鹿げていると書いてあるものだ—現在の習慣)

(9)曖昧文

曖昧文はきりが無い。ケースバイケースで事例を積み重ねるしかないが、ここではそのいくつかと検分のポイントを示す。

He foolishly opened the door. (愚かにもドアを開いた)

He opened the door foolishly. (ばかなやり方でドアを開いた)

* 上は全文修飾、下は語修飾で opened に掛かる

Tom can only speak this loud. (トムはこんな大声でしかしゃべれない)

* this は副詞で loud に掛かる

The curry was hot and so was the tea. (カレーもお茶も熱かった)

* この so は too の意味なので、hot を「辛い(お茶?)」とはとれない

John was married. (ジョンは結婚した/していた)

* are を状態動詞ととるか変化動詞ととるかによる

I don't like fat men and women. ([太った男]と

[女] / 太った [男と女])

* 常識的に読めば fat は両方の名詞に掛かる

My favorite girl's name is Yoshiko. ([好きな少女] / [好きな少女の名前])

* どちらかは文脈でしか読めない

The robber was unmasked. (仮面をしていない / 仮面をはがされた)

* unmasked を形容詞とみるか、動詞とみるかによる)

Where did you get hurt? (どこでケガをした / どこをケガした)

* 英語には助詞がないのであいまいさが生じる例

They asked me what I knew. (知っていることを / 何を知っているか)

* 関係詞か疑問詞か

the visible stars (肉眼でみえる星)

the stars visible tonight (今夜目に入る星)

* 名詞の前に置かれた形容詞は継続的・分類的、後だと一時的・個別的

Mother is boiling. (母はうだっている / 母はゆでている)

* 自動詞で「うだる」だが、目的語が省略されると読めば他動詞「ゆでる」

He climbed the mountain. (山を(頂上まで)登った / 山登りをした)

He climbed up the mountain. (山を上へと登っていった)

* 上は他動詞、下は自動詞 + 前置詞で動きが感じられる

(10)現在分詞形の形容詞

・自動詞の現在分詞は「...している」、他動詞の現在分詞は「人を...させる」

自動詞：a sleeping baby (眠っている赤ん坊) a departing visitor (去ってゆく訪問者) falling leaves (落ちてゆく葉っぱ)

他動詞：an interesting person (ヒトを面白くさせるひと 面白いひと) a shocking accident (ヒトを驚かせる事故 驚くべき事故) embarrassing news (ヒトを当惑させる知らせ 当惑する知らせ)

・他動詞の過去分詞は「...させられる」

an interested collector (興味をもたせられた収集家 興味をもった収集家) an interested look (興味をもたせられた顔つき 興味をもった顔つき) smoked fish (燻された魚 燻製の魚)

- ・自動詞の過去分詞は形容詞と考える
- * 自動詞は本来受身にならない

Winter is gone. (冬は過ぎ去っている)

The chastening truth is that we all play the role of those people next door to somebody.

(つくづく思い知るの、人はみな誰かのお隣さんの役回りだということである)

* chasten 他動詞「懲らしめる」chastening「人を懲らしめる」(自分もヒトのうちなのだから)「自分を含めたヒトが懲らしめられる」「思い知らされる」「つくづく思い知る」

To meet a wolf unexpectedly is frightening enough.

(思いかけず狼に出会うことは十分に恐ろしい)

* frighten 他動詞「恐れさせる」frightening「人を恐れさせる」(自分もヒトのうちなのだから)「自分を含めたヒトが恐ろしがる」「恐ろしい」

One's loving grandmother has turned into this terrifying beast.

(優しいおばあちゃんが、こうした恐ろしい獣に成り変わってしまった)

* love 他動詞「愛する」loving「人を愛する」「やさしい」

Now and then I have tested my seeing friends to discover what they see.

(時々私は眼のみえる友人たちが何を見ているのか知ろうと試してきた)

* see 自動詞「見る、見える」seeing「見えている」かつ名詞の前にあるので継続的「眼の見える」「健眼の」

(11)省略

・評論・論説などでは省略表現がきわめて多い。完全な文に復元してみる。そばに必ず復元する要素はある。勝手に想像で作らないこと。

* 以下のカッコ内は省略要素を復元したもの

The January temperatures of this (year) and of last year show interesting parallel.

Intimacy is no excuse for rough manners, though the majority of us seem to think it is (an excuse for rough manners.)

Some fish live in rivers and others (live) in the sea.

His comment made Peter happy, but (it made) Carol angry.

Self-reliance is just as important in thought as it is (important) in action.

I didn't dance with him, because he didn't ask me to (dance with him).

(I) Wonder what they're doing.

(It's a) Pity you missed the first act of the play.

Gestures, when (they are) used properly and naturally, add spice to conversation.

We have no certain knowledge of any consciousness but our own (consciousness).

Because the behaviour of other is similar to our own, we surmise that they are like us; it is a shock to discover that they are not (like us).

They forthwith proceed to hand it over, in fact if (they does) not (forthwith proceed to hand it over) in form, to "strong men".

Does it not contradict the English indifference to the art? (It does) Not really (contradict the English indifference to the art), because it is found in people who have no aesthetic feelings whatever.

Machines have altered our way of life, but (machines have) not (altered) our instincts.

If you choose your friends on the ground that you are virtuous and want virtuous company, you are no nearer to true friendship than (you are) if you choose them for commercial reason.

(12)同義語反復

英語は対語もしくは同義語反復がじつに多い。これらはいは日本語なら一語で済ませられるもの(本誌の2003年12月号の山岡洋一稿に、川端康成のサイデンステッカーによる英訳で、一語を英文二語に訳している格好の例が示されているので、参照されたい)。無理に二語に対応させるのは徒勞というもの。

I once saw my own headmistress begin to stammer and simper like an idiot.

(わたしの行っている学校の女の校長先生も、このママのすさまじい一撃で、しどろもどろになり、ばかみたいにへらへら笑わせられたのを、まえに見たことがあるんです。—市販本の訳だが—考の余地あり、直してみてください)

*これは前にも出した例だが、stammer and simper は s の音をそろえた対語なので、くどく訳さない。
like an idiot は対語全体に掛かる

My mother was standing very still and stiff, staring across the street at the little man.

(ママは体をじっと固くして、通りの向こうの老人を見つめていました—市販本の訳。still and stiff の訳は、これで結構です)

(13) 叙述用法と限定用法

1. 形容詞の機能に、限定用法(直接、名詞を修飾する。例: blue jacket)と
叙述用法(動詞の補語となる。例: I am tired.)の二つがある

2. 限定用法のみの形容詞(former, spoken, atomic, complete, favorite など)、叙述用法のみの形容詞(alone, bound, worth など)、両方に用いられるが意味が変わる形容詞がある

3. 意味が変わる形容詞に注意

She has a certain charm. (限定: ある種の魅力をもっている)

He is certain to come. (叙述: 確実にやってくる)

What is your present address? (限定: 現在の住所)

All the members were present. (叙述: 出席していた)

I found the key by happy chance. (限定: キーが見つかって幸いでした)

I am happy to hear that. (叙述: それを聞いて嬉しい)

A happy suggestion. (限定: 適切な提案)

His boss wasn't happy with his work.. (叙述: 彼の仕事に満足しなかった)

お気づきかとも思うが、(9)の でやった、「前から修飾すれば永続的、後から修飾すれば一時的」の原則が、ここでも適応できよう。そう、文法的に解明できれば、理屈抜きに覚える労力が避けられる。この連載の主旨も実はそこにあった。

1年に渡って連載してきましたが、これ以外の語法は細かいものですから、逐一疑問点にぶつかったとき、辞書・文法書を頼りに納得してってください(理屈で覚えれば力となります)。

英語は論理的な言語です。規則を知れば、誰でもが楽しく学べるはず。その当たり前の規則を教えな(ひょっとすると知らない?)教員は教育の場から退場してほしい。実際、語学教員はいったい何をやっているのだろう。

まあ逆に、そういうご時世だからこそわたしのような生半かな知識の者でも出番があるというものかもしれません。私は今、翻訳を通り越して、英文を正しく読む方法を極めたくかつそれを伝えたく、熱情を感じています。正しく読めるから、やろうと思えば翻訳もできる、のです。週16時間の英語授業が4年間続いたという戦前の英語教員養成校として名だたる東京高等師範学校、その教育法を手探りでいま復元したく思っています。

本連載は今回でおしまい。機会あればつぎは、「誤訳で学ぶ英文法」といったものを書いてみるつもりです。

どこかで読者の皆さんとお会いできますことを。

株式会社アイディ
柴田耕太郎 主宰 『翻訳ジム』

事務担当 前川

TEL: 03-3357-1189

FAX: 03-3357-4489

Email: educa@id-corp.co.jp

〒162-0054 新宿区河田町7-6 ID河田町ビル

シャーロック・ホームズの基礎知識

ほとんどの方がどこかで一度はホームズのストーリーに触れたことがあるのではないのでしょうか。子供の頃、ジュブナイル版で読んだという方も、中学や高校の英語の教科書で読んだという方も多いと思います。また、イギリス、グラナダTV制作のドラマで見た方も、コミック化されたホームズを読んだ方もいらっしゃるかもしれません。ホームズの冒険に胸を躍らせた記憶というのは、かなり多くの人を持っていることだと思います。特にミステリファンにとっては、ミステリに興味を持つきっかけという大切な存在だったりします(かくいう私もそうです)。小学校の図書室で、シャーロック・ホームズは明智小五郎と人気を二分していた気がします。「赤毛連盟」、「踊る人形」、「まだらの紐」……あなたが最初に読んだのはどの作品だったのでしょうか？

今年の1月6日はシャーロック・ホームズの150回目の誕生日のようです。この節目の年を記念して、世界各国でホームズのファンや研究者(シャーロックアンといい、ベーカー・ストリート・イレギュラズという正式な団体もあります)が様々なイベントを開催しています。ちなみに日本では、「ミステリマガジン」誌4月号(2月25日発売)で「ホームズ150回目の誕生日」という特集が組まれています。全作品解題などもあるので、興味のある方はご覧ください。

そこで、というわけではありませんが、私的ミステリ通信第8回、第9回はシャーロック・ホームズ特集でいきたいと思います。

シャーロック・ホームズはいうまでもなく、アーサー・コナン・ドイル(Arthur Conan Doyle)が創造した探偵です。ドイルの作品の記述から計算すると、ホームズは1854年生まれになるようです。ところで生年はいいとしても、誕生日はどこに書いてあったかな?と思った方、そう、ドイルが書いたホームズ譚(canon 正典あるいは聖典といいます)にはそんな記述はありません。後世のとあるシャーロックアンが勝手に決めてしまっただけです(まさに早い者勝ちです)。このシャーロックアンという人々はなかなかユニークで、ホームズの正典を精読し、分析、研究しているのですが、シャーロック・ホームズは実在したという前提に立って大真面目に研究をしているのです。

もちろんこれはお遊びであり、本当にそう信じ込んでしまっているわけではありません、念のため。正典には書かれていないホームズの前半生や、正典の矛盾点などを探求し、そこから隠された真実(?)を探っているのです。

中でも私が感動した労作はW・S・ベアリング=グールドの『シャーロック・ホームズ ガス灯浮かぶその生涯』(小林司・東山あかね共訳 講談社)です。正典に載っている事柄も、それ以外のことも含めて、ホームズの生涯を年代順に整理してあり(正典は事件発生時間の順には発表されていません)、ホームズの両親のこと、出身校のこと、ワトソンは何度結婚したのかなど、シャーロックアンにとってはおなじみの問題に、作者はすべて判断をくだしているのです。巻末の年代表、原題と邦訳との対照表などの付録もとても役に立つ(ただし邦訳は1977年に出ていますので、もちろんそれ以降の資料は載っていません)すぐれものです。また、付録のシャーロックアン度検定問題集はご愛嬌です(と言っても、とても難しくて歯が立たないのですが)。

ここで、ベアリング=グールドに習って、あなたのシャーロックアン度チェックを試みたいと思います。ただし、なにせ「私的ミステリ通信」なので、出題傾向および採点基準は飽くまで「私的」なものですが、どうぞご容赦ください。クイズを楽しみながら、ホームズの生涯を俯瞰していただければ幸いです。

以下の十問に答えてみてください。(文中の題名は便宜上、すべて延原謙訳の新潮文庫版に典拠しています)

1. ホームズの「伝記作者」、ワトソン博士のフルネームは?
 - a. ジェームズ・ワトソン
 - b. ジム・K・ワトソン
 - c. ジョージ・ワトソン
 - d. ジョン・H・ワトソン
2. ホームズのデビュー作、『緋色の研究』で、ホームズとワトソンが初めて出会った場所は?
 - a. 病院
 - b. アフガニスタンから帰ってくる船の上

- c. スコットランド・ヤード
 - d. 殺人現場
3. ワトソンが依頼人と結婚することになった『四つの署名』にはどこの国の秘宝をめぐる事件か？
- a. アフガニスタン
 - b. インド
 - c. 中国
 - d. 日本
4. ホームズが「いつでも『あの女』と呼ぶ女性」は誰？
- a. ヴァイオレット・ハンター
 - b. メアリー・モースタン
 - c. アイリーン・アドラー
 - d. ハドソン夫人
5. 「赤毛連盟」で赤毛の男性限定の求人広告に応募して採用されたウィルソン氏がやらされた仕事は？
- a. 過去十年分のタイムズ紙を書き写す
 - b. 百科事典を A から順に書き写す
 - c. 文学全集の朗読
 - d. 造花作り
6. 「白銀号事件」の中のホームズのせりふです。「あの晩の犬の不思議な行動にご注意なさるといいでしょう」この「犬の不思議な行動」とはどんな行動でしょう？
- a. 激しく吠えた
 - b. びっこをひいていた
 - c. 二本足で立った
 - d. 何もしなかった
7. 「最後の事件」でホームズが宿敵モリアーティ教授と格闘した場所は？
- a. スイス・ライヘンバッハの滝
 - b. サセックス州の海岸
 - c. ロンドン塔
 - d. テムズ川の快速船の上
8. 「空き家の冒険」で、死んだことになっていたホームズが再びワトソンの前に姿を現わした時、どんな人物に変装していましたか？
- a. メッセンジャー・ボーイ
 - b. 古本屋の老人
 - c. 浮浪者
 - d. ハドソン夫人
9. ホームズ・シリーズに「殺人犯」として登場していない動物は？
- a. へび
 - b. 犬
 - c. ライオン
 - d. くらげ
10. ホームズの兄、マイクロフトがいつもいるクラブ

の名前は？

- a. ソクラテス・クラブ
- b. ユークリッド・クラブ
- c. ディオゲネス・クラブ
- d. アリストテレス・クラブ

解答と解説です。

1. 正解は d. ジョン・H・ワトソンです。ドイルはワトソンの名前をジェームズ・ワトソンと言う実在の友人から借りて創作したのですが、一度だけすっかり間違えてワトソン夫人に「ジェームズ」と呼ばせてしまっています。
2. a. 病院です。ワトソンはある日、かつての勤務先である聖パーソロミュー病院の後輩スタンフォード医師から、今病院に来ているある人物が、一緒に間借りをする相手（要するにルームメイトですね）を探していると聞くのですが、その人物こそホームズでした。そしてホームズは病院で何をしていたかということ、ヘモグロビンに反応して沈殿する薬品を発見したところでした。その場で意気投合した二人は、ベーカー街221番地Bのハドソン夫人の下宿に住むことになったのです。
3. b. インドです。依頼人メアリー・モースタン嬢の父モースタン大佐の行方を探るうちに、ホームズ、ワトソン、そしてメアリーの三人はインド・アグラ地方の秘宝をめぐる殺人に巻き込まれます。そしてその謎が解明される頃には、ワトソンとメアリーの間に恋が芽生えていたのです。
4. c. アイリーン・アドラーです。3はワトソンの恋の問題でしたが、今度はホームズをめぐる女性の問題です。「ボヘミアの醜聞」に登場する元オペラ歌手アイリーンは、ボヘミアの国王の心を惑わせ、しかもまんまとホームズを出し抜いた魅力的で賢い女性です。ホームズは決して口には出しませんが、アイリーンはある意味特別な女性として印象に残っていたようです。ちなみに a. ヴァイオレット・ハンターは「柵屋敷」に登場する聡明な家庭教師です。b. メアリー・モースタンと c. ハドソン夫人については、2、3の解説にそれぞれ登場済みですね。
5. b. 百科事典を A から順に書き写す、が正解です。この奇妙な仕事は実は、ある大きな企みのために、ウィルソン氏を勤務先から引き離しておくための口実だったのです。
6. d. 何もしなかった、です。このせりふはホームズがスコットランド・ヤード（ロンドン警視庁）のレストレード警部に向けて言ったもので、後に様々

なミステリ作品の中で何度も引用されることになった歴史的(?)な言葉です。レースを控えた競走馬白銀号の馬屋の番犬が、犯人が通った時になぜ吠えもせず、静かにしていたのかが手がかりになる、と言うのがホームズの真意です。

7. a. スイス・ライヘンバッハの滝、です。にせの手紙でワトソンをホームズから引き離れたモリアーティ教授がホームズと一騎打ちした場所です。お互い互角の戦いでしたが、ホームズが日本のバリツ(武術?)を習得していたおかげで助かった、と後に語っています。しかし、モリアーティ味の報復を恐れたホームズは自分も滝に墜落して死んだことにしようと、ワトソンにも真実を告げずに身を隠してしまいます……というのは、後で書かれたことで、「最後の事件」を発表当時、ドイルはホームズものを書くのに嫌気がさして、ホームズを殺してシリーズを終わらせてしまおうと考えていたのです。しかし、ホームズファンからの非難にたえきれず、とうとう「空き家の冒険」でホームズを復活させる羽目になるのです。

8. その「空き家の冒険」の問題です。正解は b. 古本屋の老人、です。ライヘンバッハでホームズが「墜落死」してから3年後のある日、ロンドンの人ごみでワトソンは古本屋の老人とぶつかってしまいます。この老人はそのすぐあとにワトソンを自宅に訪ねてきます。本を売りつけようとする老人を追い返そうと思っていた矢先、老人の言うままに自分の後ろの本棚を見て、また老人を振り返ったワトソンが見たものは、なんとにこにこ笑って立っているホームズでした! 驚きと喜びのあまり、ワトソンはなんと失神してしまいます。息を吹き返したワトソンに、ホームズは驚かせたことと、ワトソンまでだましていたことをわび、今までのいきさつを語ります。それによるとホームズはチベットからペルシャ、エジプト、フランスをまわり、ロンドンへ戻ってきたということです。

9. 正解は c. ライオンです。「獅子のたてがみ」という作品がありますが、犯人はライオンではありません。あとの三つは人間の手先につかわれたり、あるいはその動物の本能から人を殺しているのですが、作品名をあげることは、まだ読んでいない方に申し訳ないので、控えておきます。

10. 正解は c. ディオゲネス・クラブ、です。ホームズの兄マイクロフトはイギリス政府の高官で、ホームズ以上にすばらしい頭脳を持っていますが、極度の怠け者で身体を動かすことを好みません。自宅と職場とこのディオゲネス・クラブという三箇所を動しているだけで、他の場所には滅多に足を運ばないの

です。そして問題のディオゲネス・クラブというのは、とても風変わりなクラブです。ロンドン中の社交嫌いが集まっているクラブで、特別に許可された場所以外では決して話をしてはいけません!

楽しんでいただけましたか? 正解が1問~3問だった方、ホームズ好きですね。子供時代、楽しく読んだ記憶がおありではないでしょうか? 4問~6問、ホームズ・ファンですね。きっと正典のほとんどを読破されたのでしょうか。7問~9問、ホームズ・マニアでしょう。周辺書や関連書が出ていないか、いつもチェックされているのでは? 全問正解した方、あなたこそ真のシャーロックアンです!

「空家の冒険」で復活したホームズは、またたくさんの難事件を解決した後、探偵を引退し、サセックスで養蜂業を始めました。「最後の挨拶」は、サセックスにいるホームズが国際問題という大きな事件に取り組む作品で、当時のヨーロッパの政治情勢を色濃く反映しています。

ホームズ譚が後のミステリに与えた影響は計り知れないものがあります。名探偵がいて、その助手兼記録者がいるというスタイルのミステリはみな、ある意味ホームズもののパスティシュだと言ってもおかしくはありません。ホームズは元祖名探偵というわけではないのですが、名探偵といえばホームズ、ホームズといえば名探偵、というイメージはイギリスを飛び出して、世界各国に広まっています。日本では97、98年頃に複数の出版社から新訳の全集が出ていますし、それ以前の邦訳も簡単に手に入る状態にあり、今でもその人気は衰えていません。

冒頭で触れたシャーロックアンの人たちのように、研究と言う形でホームズへの情熱を表明する人々もいれば、自分自身の希望や、愛ゆえの風刺をこめて、自由な形でホームズを発展(?)させたフィクションを書く人々もいます。今までに書かれたパロディ、パスティシュの量はとても膨大です(ホームズは女性だったとか、宇宙で事件を解決したなど、とんでもない設定のものもあります)。次回は「シャーロック・ホームズのムダ(?)知識」と題して、正典以外のホームズ、つまりパロディ、パスティシュを紹介してみたいと思いますので、どうぞお楽しみに!

翻訳教育と翻訳の技術

先週号で翻訳教育に触れたところ、いくつかのメールをいただいた。そのなかに、翻訳というのは結局のところ技術の問題なので、教育ができないわけがないという指摘があった。教育ができないとすれば、それは教える側が怠慢なだけではないかという指摘である。この点について少し考えてみたい。

この指摘は2つの部分からなっている。第1に翻訳ができるかできないかは結局のところ、技術を身につけ使いこなせるかどうかの問題だという指摘、第2に、したがって翻訳は教育できるはずだという指摘である。この2つについて順番に考えていこう。

第1の指摘については、基本的に賛成である。翻訳にはたしかに技術と呼べるものがある。ノウハウといえるほど整理されている例は知らないし、おそらくは世界中を探してもないのではないかと思うが、翻訳でぶつかる問題の大部分がある種の技術で解決できることは確かだと思う。

この点は、逆の観点から考えていくと分かりやすい。翻訳という作業は、外国語で書かれた原文を読む作業、原文の内容を理解する作業、理解した内容を母語で表現する作業の3つの部分に大きく分かれる。読み、理解し、書くのが翻訳だ。この3つの作業に常人にはない才能、啓示やひらめきなどを必要とする部分があるだろうか。そういう部分があれば、翻訳ができるかできないかは、技術の問題ではなくなる。翻訳教育は不可能である。特殊な才能をもっていれば、教育など受けなくても翻訳はできるし、特殊な才能を持っていない人は、どのような教育を受けても、翻訳ができるようにはならない。

このように考えれば、答えは決まっている。翻訳という作業に特殊な才能など必要ない。翻訳の作業には神秘的な部分は何もなく、翻訳の作業で使っているのはすべて、技術と呼べるものである。他人に伝えられるはずのもの、教育を受け、訓練を受ければ、だれでも身につけられるはずのものである。

このように、翻訳教育についての第1の指摘は正しいといえるはずだが、だからといって、第2の指摘が正しいとは限らない。翻訳でぶつかる問題の大部分が技術で解決できるとしても、だからといって、翻訳教

育が可能だとはかぎらない。

第2の指摘が正しいかどうかを考える際には、少々極端な例をみても分かりやすいかもしれない。たとえばマラソンの例を考えてみたい。マラソンには見たところ、何も神秘的な部分はない。42.195キロをいちばん早く走れた人が勝つ。それだけだ。マラソンの指導者のなかですぐに名前が思い浮かぶのは小出義雄監督だろう。指導した選手がオリンピックで3大会連続してメダルを獲得しているのだから、たぶん、世界一の指導者だといえるはずだ。マラソンの技術を教え、勝てるようにトレーニングをする能力が誰よりも高いはずである。では、小出監督なら、マラソン教育は可能なのだろうか。小出監督にこう聞いてみるといい。高校生のとき以来何十年の間、数十メートル以上を走ったことが一度もないが、週1日2時間なら時間を取れるから、オリンピックのマラソンで勝てるように教えてほしいと。そんなことは不可能だといわれるに決まっている。では、マラソン教育は不可能だということなのだろうか。

例が極端すぎると思えるかもしれないが、極端な例を考えると、問題がどこにあるのかが見えてくる場合がある。マラソン教育は可能はずである。小出監督が指導した選手がオリンピックで3大会連続してメダルを獲得している事実をみれば、そう考えるのが自然だ。だがマラソン教育は不可能である。わたしが小出監督の指導を受けても、マラソンのメダリストにはなれるはずがない事実をみれば、そう考えるしかない。マラソン教育については、可能論も不可能論もどちらも正しいのだろうか。もちろん、どちらも正しくないのだ。ある条件があれば可能だが、その条件がない場合には不可能だといふべきなのだ。問題はどのような条件があれば可能なのかである。

翻訳教育についても同じことがいえる。じつのところ、条件が整っていれば翻訳教育が可能なのは、疑問の余地がない。その点を示す逸話を紹介しよう。20年ほど前の話だが、ベテラン翻訳者と話す機会があった。翻訳学校で教えているというので、どのような人がなぜ翻訳を学びにくるのかを質問してみた。答えは意外だった。いや、翻訳を学ぼうと考える人がいるのは不思議な話で、翻訳はできて当たり前ですからという。失業していたときにたまたま、旧制高校時代の同

級生に頼まれて翻訳をするようになったのだが、そのときに翻訳ができないなどは考えもしなかったというのだ。なぜ考えもしなかったのか。それは旧制高校で教育を受けたからだ。旧制高校では授業のほぼ半分が語学であり、なかでも翻訳の能力を高めるための教育を徹底して行った。欧米の進んだ技術や思想を吸収するために翻訳が緊急の課題だったところに作られ、翻訳教育のための全日制エリート教育機関ともいえるほどだったのが旧制高校だ。そこで教育を受けたのだから、翻訳はできて当たり前なのだ。

要するに、旧制高校のようにそれにふさわしい条件が整っていれば、翻訳教育が可能なのは確かである。逆にいえば、条件が整っていなければ、翻訳教育は不可能である。これも当然のことだ。

条件の1つは学ぶ側の力である。マラソンの例に戻ろう。世の中はかなりの程度、公平にできている。小出監督の指導を受けられないからといって、世の中の不公平さを嘆く理由はない。小出監督の指導を受ける選手は、小さなときから駆けっこが大好きで、それなりの練習を積んできた人だけだ。本人にとってはたぶん楽しい練習なのだろうが、他人がみれば、信じがたいほど苦しそうな練習を積んでいる。練習の積み重ねがないのなら、マラソンに出られないのは当然だし、まして勝つことなどできない。

マラソンと比較すれば、とくにオリンピックのマラソンに出場し、勝つことと比較すれば、翻訳ははるかに簡単ではあるが、それでも積み重ねが大切であることに変わりはない。外国語で書かれた文章を読み、さまざまなことを考え、母語で文章を書く。どの部分をとっても、本人にとっては楽しいとしても、他人にとっては苦しように思えるかもしれない勉強を積み重ねていなければならない。もちろん、マラソンとはさまざまな違いがある。最大の違いはたぶん、年齢制限がないことだろう。マラソンなら30歳を過ぎてから練習をはじめても、たぶん遅すぎるだろうが、翻訳の場合はそんなことはない。だが、積み重ねがなければ力がつかない点は同じだ。

翻訳に特殊な才能が必要なのであれば、才能がある人なら、翻訳学校で少し学んだだけで、隠れていた能力が一気に開花するかもしれない。だが、翻訳に必要なのは特殊な才能ではない。ごく普通の力だ。外国語で書かれた文章を読む力、さまざまなことを考え理解する力、母語で文章を書く力はどれもごく普通のものだが、地味な努力の積み重ねがなければ身につかない

ものでもある。世の中はかなりの程度、公平にできているのだ。地味な努力の積み重ねがなくても素晴らしい能力を発揮できるというわけにはいかない。

だが、この点から、じつは翻訳教育のほんとうの問題がでてくる。マラソンに必要な積み重ねは走ることだが、翻訳の場合、地味な努力の積み重ねで身につけておくべき力とは何なのか。外国語を読む力、理解する力、母語で書く力。どの力もとくに変わったものではない。本来なら学校が教えていなければならぬ基本的な技術ばかりだ。翻訳はできて当たり前という意見があるのは、学校教育がしっかりしていれば、翻訳に必要な力は誰でも身につけているはずだからだ。学校教育が本来の任務を果たしていれば、翻訳はできて当たり前、できなければ恥だといえるはずなのだ。では、翻訳教育とは何なのか。いったい何をどう教えるべきだというのだろうか。

翻訳教育が可能かどうかは、いまの学校教育との関係で考えるしかない。翻訳教育で教えるべき点の大部分は、本来なら学校教育で教えるべき点なのだ。学校が16年もかけて教えられなかった点を週2時間の授業で教えることが可能なのかと考えれば、翻訳教育は不可能に決まっている。いまの日本の学校教育が本来の役割を果たしていないのは明白だから、その隙間〔ニッチ〕を埋めようとするのであれば、翻訳教育は可能なはずである。

230年ほど前に、アダム・スミスが『国富論』で当時の学校教育についてこう論じている。「オックスフォード大学では教授の大部分は長年にわたって、教える振りをするこゝろすらしていない」。たぶん、いまの日本の学校は教える振りぐらゐはしているのらゝうが、ほんたゝうに教ゑているとは思ゑない。とくに、学ゑることの楽しさや感動を教ゑてゑない。翻訳に必要な技術はどのような仕事にも必要不可欠なものばかりなので、これを十分に教ゑてゑないことは大きな問題だが、それ以上に技術を学ゑる理由を教ゑてゑない。だから、みづから学ぼうという意欲と情熱を引き出せない。意欲と情熱があれゑば、たゑいてゑのことは自分で学ゑるものなのだ。

翻訳の技術のなかには、学校では教ゑない部分もあるという意見もあるらゝう。たしかにある。だが、それは数時間もかければ学ゑる程度のものだ。それ以上の教育が必要なのは、学校教育が本来の任務を果たしてゑないからである。